

『浄土宗全書』の刊行について

石川 達也

はじめに

『浄土宗全書』（以下『浄全』）は浄土学の研究するためには必要不可欠の基礎テキストといえる。現在では昭和50年（1975）の浄土宗開宗八百年を記念して出版された第三版が広く普及しているが、初版は明治44年（1911）、法然上人七百年遠忌の記念として、今から約百年前の明治40年（1907）に出版が開始されたものである。その出版の経緯について『浄全』出版に従事した高野海音氏の「浄土宗全書の出版経過概要」（以下「出版経過概要」）など¹⁾に述べられているが、本稿では前記の論文を踏まえながら、『浄土教報』の記事や初版に付された「附言」をたよりに『浄全』の刊行が提案されてから、特に第七巻が出版されるまでの一端を見ていきたい。

1 刊行の経緯

明治39年（1906）の春、近畿において法然上人七百年遠忌記念として、浄土宗典出版の議が提唱され、これに対して有志者と資金提供者が現れた。その後、4月の教学院会議において、諮詢案第一号として「宗祖大師七百年御忌に付報恩方法」が協議された²⁾。その内容は以下の通りである。

- 一 紀念伝道の実を挙ぐる為之を奨励する手段
- 一 宗典刊行奨励法
- 一 御遺跡保存巡拝奨励法

このように『浄全』の刊行は浄土宗として七百年遠忌の記念事業という位置付けがなされた。同年8月には宗典刊行会の設立準備として、宗典刊行会規定が制定された³⁾。その規定の中で、刊行会は会長1名、事務員2名、評議員若干名を置くことなどが規定された。

会長には黒谷金戒光明寺秋浦定玄僧正が推され、庶務には野上運外氏、編修員は松井達音氏、伊藤祐晃氏が任命された⁴⁾。10月に浄土宗典刊行会設立趣意書が発起人308名より提出され⁵⁾、同月に秋浦会長によって評議員57名が囑託されている⁶⁾。

また同月に刊行会の本部を黒谷金戒光明寺内に設け、40年6月に東京支部を浅草吉野町東光社内に設置した。41年1月には本部を京都より伝通院内に移し、京都支部を上善寺に置いている⁷⁾。

編輯所は最初浅草九品寺におかれ、41年6月に浄土宗宗務所に移転し、翌年に光雲寺に移転している。

2 掲載典籍の調査と分類

高野海音氏は編集にあたった今岡（松井）達音氏について、

編輯員今岡達音氏は全書刊行の準備として、京阪神名古屋東京等各方面の蔵書寺院を歴訪し、各文庫

について親しく之を調査し、次で刊行すべき宗典の取舍、各書冊の字数計算、全書目録の編成に努力せられ⁸⁾

と述べており、仏教大学図書館に所蔵されている『宗典目録』を見ると、石橋誠道氏はその見返しに、

此目録、余曾て東都光雲台に寓居して、浄土宗典刊行に従事せし時、其目録を写し来りしものにて、原書は主として今岡達音師の編纂せられしものなり 沙門誠道識

と記しており、この目録は『浄全』刊行の為に今岡達音氏によって作成されたものを石橋誠道氏が『浄全』の編輯所であった光雲台（小石川光雲寺）で写したものであることが分かる。その巻末に「法宝典籍実地調査簿」として、調査した寺院（文庫）名を記している。それによると、京阪神では専門部文庫、法然院文庫、嵯峨正定院文庫、神戸文庫、大阪八丁目天性寺文庫、大阪道頓堀竹林寺文庫、大阪一心寺文庫、鞍馬口上善寺文庫、大雲院文庫、浄福寺文庫、寺町天性寺文庫、入信院文庫、清水坂西光寺文庫。東京では赤坂法安寺文庫、赤坂専修寺文庫、湯島称仰院文庫、通元院文庫、最勝院文庫。その他、満国寺文庫（愛知県幡豆郡）、棚尾妙福寺文庫（愛知県碧南市）、藤沢山文庫の名前が挙げられている。

宗典編集の方針として宗典刊行会規定第八条に「書籍の性質に依り分類すること」とあることから、松井達音氏は「浄土宗典の性質分類草案」を『浄土教報』紙上に公表し⁹⁾、大きく法然上人の立教開宗以前、立教開宗以後に分けた上で、立教開宗以前を正依の典籍、傍依の典籍、史乗紀伝の3部、開宗以後を正統典籍、異系典籍、史乗紀傳の3部に分類している。その後「浄土宗全書登載書目」¹⁰⁾では、所依経論、震旦祖釈、震旦餘師、選択立宗、宗要鈔記、伝戒疏釈、雜纂集録、史誌傳紀の8輯に分類している。最終的に『浄全』では、所依経論、震旦祖釈、選択立宗、宗義顕彰、要義解釈、円戒章疏、先徳述作、伝記系譜、寺誌宗史の9輯に分類された。

3 『浄全』の底本

『浄全』は『大正新脩大藏経』のように底本が明示されていない。しかし初版本の付録である「附言」という数頁の小冊子には底本の種類と所蔵者、凡例や編集後記にあたる記述がある。そこで『浄全』第七巻と第八巻に付されていた「附言」の全文を見ていきたい。まず第七巻の附言は、

附言

一浄土宗全書ハ宗祖圓光大師七百年御忌の記念として法恩の萬一に酬ひ奉らむが爲に之を發刊す
一本書の内容は浄土宗に關する正依傍依の經論及び之に属する支那日本の人師の疏釋等を網羅し兼て
宗史寺誌紀傳の類をも蒐輯して剩さず是は宗義研究諸士の座ながらに数千の經疏を繙き得らるゝ
便宜を圖り一は之に依りて宗内貴重の書籍を廣く世に紹介して其道芽増長に資し併せて是等の書籍
の散逸を防ぐにあり

一本書は漢文と和文とを問はず古態を存せむが爲に渾て原本の儘を載せたるものとす而かも之か編輯
校合につきては諸種の版本或は稿本を比較對照して其善きものを採れり

一本書の校正は四校以上を経て専ら誤謬なからむことに努めたるを以て聊か其完美を庶幾するを得む
一本書の返点送仮名に就ては最初之を附せざるの豫定なりしも斯くては頗る難解のものたらむを憂慮
し渾て之を附することゝしたるを以て組版及校正上云ふへからさる困難と手數とを経たることを諒
せられたし

一本書第七巻を以て第一回出版となしたるは宗祖大師浄土宗を開き給ひし立宗の御趣意に基きたるま

にて敢て他意あるにあらず故に今後と雖も編輯上の事情に依り巻次時に不順なることあるべし乞ふ諒せよ

一本書の第一回出版が豫定の期日に遅れたることは豫約諸彦に對して本會の不本意之に過ぎざるも創業の際諸般の準備を要したるのみならず組版方針につき前陳の如き困難なる事情に遭遇したることを賢察せられたし第二回以後諸般の方案に依り續々出版の功を擧ぐることは本會の誓て期するところなり

一本書を編纂するに方りて宗教大學及太田密道、竹川辨中、越智專明、神谷大周、松濤松巖、吉川澤誠、不染信翁、大谷文祐、松濤舜海、井上玄眞、淺井法順の諸師は各其秘藏せる圖書貸與の便を與へ或は編纂上に對し懇切なる注意を寄せられたり茲に厚意を謹謝す

因に巻頭の標題及脊文字の執筆を辱うしたる福田循誘師、表紙の意匠體裁に考案せられたる平子鐸嶺、結城素明両畫伯の勞を感謝す

明治四十年十二月廿五日 浄土宗宗典刊行會

とあり、次に第八卷の附言は、

附言

一浄土宗全書は宗祖圓光大師七百年御忌の記念として法恩の萬一に酬ひ奉らんか爲に之を發刊す
一本全書の内容は浄土宗教義に關する經論及び之に属する支那日本の人師著述の疏釋等を網羅し兼て宗史寺誌紀傳の類を蒐輯して剩さず一は他力教義研究者の座ながら数千の經疏を繙き得らるゝ便宜を圖り一は之に依りて宗内貴重の聖典を廣く世に紹介して信念修養の資に供し併せて珍襲秘藏の書冊を保存せんと欲するにあり

一本全書は漢文と和文とを問はず専ら古態を存せんが爲め渾て原本の儘を翻刻す蓋し之が編輯校合に至りては諸種の版本或は稿本を比較對照し其善きものを選びて原稿に用みたり左に第七卷と第八卷の原稿に採用したる書籍を記して讀者の参考に供すべし此等の事項は本全書全部刊行の後凡例目錄等に於て詳細記述する豫定なるを以て今は唯書目と其出版年月とを掲げ併せて藏本者の氏名を附記して愛藏の書冊を貸與せられたる深き同情を鳴謝す

第七卷 選擇立宗

(書目)	(藏書家名)
選擇本願念佛集 (元禄年間義山の建曆本を再梓せるもの)	本會
徹選擇本願念佛集 (天保年間聖光上人六百年遠忌報恩の爲信岡校合、立道門弟敬道をして再校の上開版せるもの)	野上運外師
徹選擇抄 (天保版、上梓事由上に同じ)	同
徹選擇本末口傳抄 (慶安版)	同
教相切紙拾遺徹 (同上)	同
選擇要決 (享保年中祖巖の校正上梓せしもの)	松濤松巖師
會本選擇傳弘決疑抄 (元禄年中獅谷忍澁の校讐上梓せしもの)	本會
決疑抄裏書 (正保版、諸書を参照して校正を施す)	野上運外師
同見聞 (萬治版、諸書参照校正を加ふ)	宗教大學
同直牒 (明治版、行誠校正したるもの)	本會
同疑門答 (寛文版、諸書を参照して校正を加ふ)	太田密道師

選擇口傳口筆（刊本）	本會
選擇決疑鈔見聞（享保年中の活字版を本とし他の二寫本と参照校正を加ふ）	宗教大學
第八卷選擇立宗	
選擇大綱抄（慶安版）	宗教大學
選擇之傳（寛永版）	同
選擇集文前綱義（寫本）	越智專明師
同九門玄談（寫本）	宗教大學
徹選擇集私志記（寫本，越智專明師藏本と宗教大學藏本とに對照校正せしもの）	太田密道師
選擇密要決（寫本，宗教大學藏本を本として吉川澤誠師，道重信教師，時宗日輪寺，福岡市西山派波多江某師の各藏本々對照校正せしもの）	宗教大學
選擇本願念佛集秘抄（寶永年間，西山の某校正上梓せしもの）	野上運外師
同名体決念佛本願義（寫本，本會藏本を本とし宗教大學藏及吉川澤誠師藏とを對照校正し丁數は吉川師藏に依る）	本會
同肝要義（寫本）	同
同註解抄（刊本）	同
新扶選擇報恩集（寶曆年間宗祖五百五十年御忌報恩の爲め文雄校正上梓せしもの）	宗教大學
扶選擇正輪通義（刊本）	本會
評摧邪輪（延寶年間東暉の上梓せしもの）	不染信翁師
念佛選擇評（文化年中宗祖大師六百年御忌報恩のため喚阿再梓せしもの）	神谷大周師
摧邪興正集（松濤舜海師藏天正年間の寫本を謄寫し吉川澤誠師藏慶安版と對照せしもの）	本會
辨無得道論（刊本）	太田密道師
摧邪論（寛永版）	松濤松巖師
摧邪輪莊嚴記（同上）	宗教大學
守護國家論（明治再刻本）	本會
立正安國論（同上）	同
無得道論（刊本）	樹下隆信師

一本全書行間字傍に「・何丁」と付せるは原本每紙の左終行最末の字傍に記したるものにして即ち原本の紙数を知らしむる便に供す

明治四十一年四月二十日 浄土宗宗典刊行會

追記 第三回刊行第九卷（一枚起請文，漢語燈錄，和語燈錄等）は既に製版三百餘頁に達し，第四回刊行第二卷（善導疏釋の類）も亦製版に着手せり，今後續々刊行の豫定なり。

とある。第七卷の「附言」は編集方針にすることが記述されている。第八卷の「附言」では第七卷と第八卷に収録された底本の種類と所蔵者が分かる。この中でも、寂慧『決疑鈔見聞』，持阿『選擇決疑鈔見聞』，了慧『選擇集大綱抄』，良定『選擇之伝』，貞極『選擇集九門玄談』，証空『選擇密要決』，了慧『新扶選擇報恩集』，高弁『摧邪輪莊嚴記』が宗教大学の蔵書が底本となっている。宗教大学の後身である大正大学図書館の所蔵本をみると，現在では考えられないが，その本に朱や鉛筆で直接丁数や校正記号などが書き込まれているものがあり¹¹⁾，この本を元に印刷所に送られ，植字されたと推察することができる。この

ように「附言」に所蔵が宗教大学となっているものは、大正大学図書館に所蔵されている可能性があり、『浄全』を底本にまで遡って研究するには好資料といえる。

4 編集方針

『浄全』刊行は七百年遠忌における報恩事業であるから、『選択集』を収録する第七巻から出版することになった。編集方針として第七巻「附言」に「諸種の版本或は稿本を比較対照して其善きものを採れり」とあるように、先学によって校訂がされている時代の新しい版本が多く採用されたようである。

「出版経過概要」によれば、明治40年6月1日に原稿を博文館（今の共同印刷）に送り、同20日その校正刷りが返却された。当初の予定ではすべて漢文には送り仮名を付けない編集方針であったが、難読箇所が多く、読み方が多種多様になって宗義上誤解を生みかねないことから評議会がもたれ、日本撰述の漢文ならびに支那撰述の重要書籍には皆送り仮名を附することになった。このことにより編集の手間が増え「典刊行会近況」¹²⁾では、「活版所の手数予定の倍するものあり」と出版の遅延を公表している。

その中でも前述の『選択決疑鈔見聞』は享保年中の木活字本を底本とし、他の写本と参照して校正を加えたものであったが¹³⁾、「浄土宗全書出版苦心談」によると、

京都及宗教大学の両写本により之を比較するに文字の転在一二行の衍脱は通途にして、或は脱文一二枚に及べるものあり、之により脱は補接し衍は削除し、義に於て是は取り非なるものは去り、若し甲乙相違し三本同じからず¹⁴⁾

と、校合に苦労したことが述べられている。こうして『浄全』第七巻は当初8月に出版予定であったが、12月にまで延期され出版された。

おわりに

以上のように本稿では『浄全』の刊行について、それが提唱されてから第七巻が創刊されるまでを概観した。『浄全』には底本が明記されていないものの、付録の「附言」には底本所蔵者が明示されていた。編集に関して当初は漢文に送り仮名を付けない方針であったが、読みやすさの便を考慮して、重要典籍には送り仮名を付けるようになった。しかし校正作業の増加によって編集がずれこみ出版が遅延した。

『浄全』は大正3年（1914）に第二十巻が刊行され、総計297部、16723頁におよぶ叢書となった。他宗派では『日蓮宗全書』が明治43年から大正5年、『西山全書』が大正2年、『真宗全書』が大正2年から大正5年、『真宗大系』が大正5年から大正14年、『曹洞宗全書』が昭和4年から昭和13年、『真言宗全書』が昭和8年から昭和14年、『天台宗全書』が昭和10年から昭和12年、『豊山全書』が昭和12年から昭和14年の刊行であるから、『浄全』は他宗派に先駆けて刊行されたということが出来る。

その後、大正4年（1915）から昭和3年（1928）にかけて『続浄土宗全書』（『続浄』）全19巻が刊行された。これは『浄全』に収録されなかった典籍を集めて刊行したものである。『続浄』にも「宗書保存会会報」という小冊子が付録されており、解題と底本が記されていた。昭和3年（1928）から昭和17年（1942）にかけて『浄全』『続浄』の二版が企画された。

『浄全』刊行年表

明治 39 年	1906	4 月	教学院会議において「宗祖大師七百年御忌に付報恩方法」が協議される
		8 月	宗祖七百年遠忌記念事業として宗典刊行会の設立準備がされる
		10 月	浄土宗典刊行会設立趣意書が出される
明治 40 年	1907	6 月	京都黒谷宗典刊行会，東京支部を浅草吉野町東光社内に設置する
		12 月	浄土宗全書巻七を創刊（同書刊記）
明治 41 年	1908	1 月	本部を京都より東京小石川伝通院内に移し，京都支部を上善寺に置く
		4 月	浄土宗全書巻八を刊行（同書刊記）
		6 月	編輯所を浅草九品寺から浄土宗宗務所内に移転する
		7 月	浄土宗全書巻二を刊行（同書刊記）
		8 月	浄土宗全書巻九を刊行（同書刊記）
		12 月	浄土宗全書巻三を刊行（同書刊記）
		12 月	浄土宗全書巻五を刊行（同書刊記）
明治 42 年	1909	5 月	浄土宗全書巻四を刊行（同書刊記）
		9 月	浄土宗全書巻十二を刊行（同書刊記）
		11 月	浄土宗全書巻六を刊行（同書刊記）
明治 43 年	1910	1 月	浄土宗全書巻十三を刊行（同書刊記）
		6 月	浄土宗全書巻十を刊行（同書刊記）
		6 月	浄土宗全書巻十六を刊行（同書刊記）
		10 月	浄土宗全書巻十五を刊行（同書刊記）
明治 44 年	1911	3 月	浄土宗全書巻十四を刊行（同書刊記）
		4 月	浄土宗全書巻一を刊行（同書刊記）
		10 月	浄土宗全書巻十一を刊行（同書刊記）
大正 2 年	1913	4 月	浄土宗全書巻十七を刊行（同書刊記）
		8 月	浄土宗全書巻十八を刊行（同書刊記）
		11 月	浄土宗全書巻十九を刊行（同書刊記）
大正 3 年	1914	1 月	浄土宗全書巻二十を刊行（同書刊記）

註

- 1) 『浄全』二一卷。その他には、戸松啓真「旧版浄土宗全書について」（『浄全月報』NO.1），岸信宏「浄土宗全書の刊行をめぐる」（『浄全月報』NO.2），大橋俊雄「『浄全』の編輯にあたった人たち」（『浄全月報』NO.2）が挙げられる。また『浄全』二一卷の解説では、藤堂恭俊氏が『浄全』解題執筆者の略伝を載せている。
- 2) 『浄土教報』694（明治 39 年 5 月 7 日）
- 3) 『浄土教報』712（明治 39 年 9 月 11 日）「出版経過概要」にも転載。
- 4) 『浄土教報』714（明治 39 年 9 月 24 日）

- 5) 「出版経過概要」に掲載。
 6) 『浄土教報』719 (明治39年10月29日)
 7) 『浄土教報』786 (明治41年2月10日)
 8) 「浄土宗全書の出版経過概要」 p 5
 9) 『浄土教報』716 (明治39年10月8日)
 10) 『浄土教報』758 (明治40年7月29日)
 11)

書名		請求番号
決疑鈔見聞	万治2年8月,山形屋七兵衛尉版	154 / 112 / 1
選択決疑鈔見聞	享保年間の木活字版	154 / 116 / 5
選択集大綱抄	慶安2年初夏,中村長兵衛版	154 / 150 / 3
選択之伝	寛永21年初春,杉田勘兵衛版	154 / 167 / 1
選択密要決	写本	154 / 92 / 1
新扶選択報恩集	宝暦10年秋,植村藤右衛門・柳田三郎兵衛版	154 / 152 / 2
摧邪輪莊嚴記	寛永3年の跋がある版本	154 / 221 / 1

- 12) 『浄土教報』764 (明治40年8月26日)
 13) 第八巻の附言 (明治41年4月20日)
 14) 『浄土教報』786 (明治41年2月10日)